

## 「親子連動型軽度発達障害」



兵 庫 県

笹 森 理 絵

「どうしよう!!時間がない!!何も出来てない、何もわからない!!どうしよう!!」

ひどい動悸<sup>どうき</sup>と不安と追い詰められた気持ち。頭の中は真っ白だ。開いた数学の教科書を見ても、自分のわかる問題が一問もない。他の教科は大丈夫なのに、数学だけはどうにもならないのだ。もう明日がテストだというのに、たった一日で何が出来るというのだろうか。

また、これではとんでもない点数を取って、今度こそ本当に留年になってしまう。

ああ…万事休すだ…。

いつもここで目が覚める。そうこれは夢…。

三十四歳になった今もまだ、私はこの夢を見る。焦りと追い詰められ感、鮮やかなまま、頭の中に冷凍保存され、いつでもそれは解凍されて私の脳裏に蘇る。よみがえ

実は小さい頃から、「私は皆と何か違う」と感じてきた。数字に弱いことだけではなく、様々なことと皆とは感じ方や考え方が違ったり、変わった行動をしていた。

ぱつと見、ものすごく変というわけでもないけれど、でもやっぱり皆とは何かが違う。マカロニサラダに梅干が一個丸ごと入っているならば、見るからに「変!!」だとわかるのだが、私の場合はマカロニサラダに刻みピクルスが混ざっている感じだろうか。変は変だが、鼻をつまんで息を止めれば、食べられないこともない。そんな感じの変さだ。

自分だけではなく、周囲も「変人」というところまでは行かないが、かなり個性の強い人」と私を見に来たらしい。

学校の懇談会でも「ユニークなお子さんですね」と担任にコメントされて、母親も笑うに笑えない思いをしたことがあったそうだ。

いつも発想が人と違っていたり、やたら画像記憶だったり、投げかけられた言葉の意味がわからなくて全てをそのまま真に受けて混乱したり、かと思うと地図にやたら強くて絶対に道に迷わなかったり、鉱物や鍾乳洞に魅かれたり、食虫植物にはまったり、やたら細かくこだわってしまったりする。

小学校の低学年の頃に、母親に「これはロゼットというのよ」とタンポポの葉を指して言っぴりされた。タンポポなどの葉が地面に広がって寒さに耐える状態をロゼットと言うのだが、大人でも知らないマニアックなことを私は沢山知っていた。

そんなふうには昔からエピソードは色々ある。行方不明になってパトカーが出動したり、幼稚園の頃はなかなか教室に入らなくて、トイレに行くと言っては園庭でブランコに乗っていたり、叱られて死んだフリまでした。

小学校の頃は、最初に憧れたのが恐竜で、化石を掘る人になりたい!!と思ったのだが、化石を掘る古生物学者になるには、算数があるんだよ…誰かに言われて算数嫌いの私はそれを泣く泣く諦めて、次に憧れたのが考古学者。これなら大学は文系だ!ということで、小学生から一途過ぎるほど真っ直ぐにそれを目指した。

生活面では忘れ物が多く、服も裾がはみ出したりして、だらしがなく、おしゃべりはひどいし、落ち着きはないし、数学以外の成績と本人のだらしなさのギャップが結構きつくて、皆が「なんで?」と首を傾げていた。

しかも、外見は女の子なのに、やっていることは粗雑で大きっぱでおてんば。そのうち、誰からも「男の子」と言われて、名前に「男」つけて呼ばれるようになり、友達、後輩、親戚、皆、私を男

みたいだと言うのだ。

中学生になっても通知表に「落ち着きがない」と書かれて、体育祭でも陸上競技場の壁によじ登り、先生に殴られたのを覚えている。

また、恐ろしく不器用で、細かいことや運動はさっぱりだったから、ドンくさいとはまさに私のこと?という感じだった。

学年が上がるにつれ、苦手な数学が更に出来なくなつて、他の教科とは偏差値にして三十以上も差が出てしまった。どうしてここまで、成績に特定の落ち込みがあるのか、私も親も先生もわからず、ただひたすら「ガンバレ」と言われ続けたが、自分でもどうしようもない。問題を見て考えるが、頭が真っ白になつてしまい、霧がかかったようになって、頭が混乱してしまい、到底、答えを導き出せずにテストはいつも三点や五点だった。

おまけに化学も物理も計算が絡むと出来ないし、大好きで得意な社会科も縮尺計算やグラフの読み取りや、計算になるとさっぱり進まなくなること、自分でももどかしくて仕方がなかった。どうも、数字が絡むとどうにもならなくなつてしまう。

とにかく数学はボロボロで一教科の為に志望校をいくつも下げて高校受験でもしんどかったし、高校では数学一教科のために常に留年の危機にさらされ続けて、死ぬような思いで進級した。

それに比べて、国語などの得意な教科はトップレベルを常に維持していたために、高校では国語や

英語の特進補習クラスに入り、同時に数学の落ちこぼれクラスに行くという、自分としては大変、矛盾した状態になってしまった。

そのうち私は頭がいいのか？それとも悪いのか？出来ることと出来ないことのこの差はいつたい何なんだろうか…と思ひ悩むようになった。

数学は出来ないが、文章を書き出すと止まらないくらい書くことが出来る。特に、漢字を覚えるのは得意だ。地理や歴史もいつもトップクラスの成績だった。

先生や親からは出来ない部分のことを常に責められて辛いことも多くあったが、その原因をこの時は誰も知らなかった。いや、それどころか皆、私の努力不足くらいにしか思っていなかった。出来る部分もあるだけに尚更、なおよさら数学の出来なさが際立って見えたのだろう。

それでも、必死の思いで大学の史学科に入り、遺跡の発掘に参加して自分の夢の入り口に立つことが出来たが、そこで私は更なる悲運に襲われる。

考古学も実は数学が必要だったのだ…。

遺物を掘るのは別雇いの工事のおじさんで、私たち学生はひたすら、測量して図面を作るのが仕事…私にはそれが出来なかった。そして、元来の不器用さで遺物をうまく扱うことさえもままならず、泣く泣くやめる事になった。古生物学者になる夢に続き、数学にまた夢を奪われてしまった。

そう、私は、こんなふうに偏りが強くて、とても個性的な人。

ところが、この個性的なところがあるのは、何と私だけではなかったのだ…。

大学を出てすぐに結婚した私には今、小学校二年生と一年生の二人の息子がいる。

長男が二歳になるくらいから、どうも周りの子どもとは何か違ってきていた。出かけていた片言がいつの間にか消えてしまつて言葉が出ない、皆とあまり遊べない、わけのわからない大泣きが始まると何時間でも止まらない。電車のおもちゃの車輪に強い興味があつたり、他の玩具がんぐでも変わった遊び方をする、遊園地などで大きな音がすると泣いてその場にいることが出来ない…。

三歳児健診の時に、言葉が出ているかなどの質問や絵の指差しなどの簡単なテストがあつたが、彼は全く保健師の方を見ようともしせずに自分勝手に動いて、とうとう最後に

「あなた、三歳でしょう??どうして名前が言えないの!?!おかしいんじゃないの!?!」  
と言われてしまった。

そこまで言われながら、出された健診結果は「異常なし」。相手に何を言われていても、それさえわかっていない長男を見ているだけで、私の心は締め付けられる思いだった。

これを親や友達に相談すると、こう言われた。

「あんたも四歳になるまで、いまいち話せなかつたけど、まあ、しっかり言葉を教えなあかんのちやうど。」

「理絵ちゃんの声かけが足りないんちゃう？もつと本を読んであげないと」

しかし、長男に本を見せても、彼は全く興味を見せずに本を逆さまにしてポイッと投げ捨ててしま  
うのだ。主人は「ボクも言葉が遅かったから似てるんだよ、焦らなくてもそのうち話すんだから気に  
するなよ」とあまり深く考えていない様子で、私一人もんもんが悶々と苦しむ毎日。

長男がそのうち児童館のクラブや幼稚園の集団生活をするようになって、彼の独特さが同年代の子  
ども達の中で浮かび上がって見えるようになり、私は焦りの色を濃くして、本屋で自閉症に関する本  
を買って家で読んだ。

「…あてはまるけど、ちよつと違うような…？」

まだ自閉症にも色々種類があるなどはあまり広まっていない頃だったので、私の買った本もカ  
ナータイプの自閉症について書かれたものだった。

私が自閉症の本を読んでいると主人はあからさまに不機嫌になった。

「この子は自閉症なんかじゃない。確かに言葉は遅いけど、でも自閉症なんかじゃない。僕に似て  
るだけだ。僕はこの子を信じているから大丈夫だ」

私はこの言葉に大きなプレッシャーを感じて、本当に辛かった…。長男の自閉症を疑う私は子ども  
を信じていず、母親失格と言われているような気がしたからだ。

五歳を過ぎてからの長男は、言葉もボチボチと出だして、玄関を出るだけで三十分もパニックを起こしたり、徒歩五分のお店に行くだけで三十分もかかって歩くようなこともなくなつて、一見はマカロニサラダの刻みピクルスくらいになつてきた。

しかし、平仮名を読むことも書くこともできない。同じ年の子ども達は自分で本を読み、自分でお手紙を書いたりできるのに、長男に鉛筆を持たせても不可思議な宇宙語みたいな記号を書くだけで、字にはならない。絵も書けないどころか、写し書きというものが全く出来ないのだ。

…やっぱりおかしい…。

しかし、周囲は皆、それを私のせいにする。

「あんたの教え方が足りてないからや。もっと叩いて叱たたつて身体で覚えさせなさい！あんたは幼稚園の時にもう漢字も書いてたよ」

「教えな覚えへんのとちゃう？」

「本を読んであげてないんとちゃう？」

そして、主人は「僕はこの子を信じているもの。そのうち書くからさ」と、のんびり構えていた。周囲は私を責め、逆に主人は全然問題視していないのだ。

頭ではわかっている。ゆっくりやればいいかと。これがこの子のペースなんだと。でも、同じ年齢の子どもの中にいる長男を見ていると、とてもじゃないけれど、納得出来ないものが自分の中に



あつた。

おかしいのか、おかしくないのか、誰かはつきりと教えて!!何度もそう思った。叫びたかった。でも、依然として主人は長男の診断には反対姿勢を貫いていた。

そんな追い詰められた気持ちの中、私は育児から少しばかり背を向けるように、仕事に行くようになった。介護士だったのだが、本格的に外で大人数の所で働くのは大学を出てすぐに結婚した私には初めての経験だった。

ところが…これが私が自分自身の持つ問題と向き合うきっかけになってしまったのだ。そう、なぜに私がピクルスなのか…。

私は上司から仕事を指示されても、最初の一個しか覚えていられなかった。焦れば焦るほど、ますます頭に入らない。特に紙に書かれていればすぐにわかるのに、耳で聞く指示になると、聞き取れなかったり覚えられないのだ。

そして、ようやく何かの仕事に取りかかっても、途中で違うことをすると、全てが中途半端になったり、混乱してわからなくなる。

また、「自分で状況を見ながら判断してくれたらいいから」というふうに言われると、もうどうし

たらしいかわからなくなつて、不安になつてしまい、どうしても他の職員が自分でどんどん仕事を見てこなしていけるのかが、私には全く理解不能だった。

いよいよ、どうしようもなくなつて、何とか上司にSOSを出そうとするが、どうしても言えない。喉まで出かかるのに言葉にならない毎日だった。

あげくに「あなたは言わないから何を考へているのかわからない」などと言われる始末。職場での不適應が日々積み重なつて、とうとう神経を病んでしまい、家族との関係も親との関係も悪くなつて、神経科に通うようになった。もう育児どころではない。

その頃に本屋で私は一冊の本と出会つた。それは…。

「片付けられない女たち」

そう、いわゆる注意欠陥多動性障害（ADHD）について書かれたものだ。

私は子どもの頃から全く片付けの出来ない人で、小学校の頃は学校の机も自宅の机もごみ溜め状態で、虫がわいたことさえあつたほどだ。親からも先生からも厳しい叱責を受けてきた。

でもどうやって片付けたらいいのか、どうなったら片付けたらいいのか、私にはわからない。余程散らからないと、ぴんと来ないこともある。

結婚して主婦になつても、やっぱり片付けも掃除も出来ず、主人にあきれられたが、どうしても主

人が満足するような掃除や片づけが私には出来ず、いつしか家の掃除や片づけ、ごみ出しは主人の仕事となった。

そう…片付けられない女…私のこと??

この疑問を恐る恐る、通院していた神経科で投げかけてみたら、先生が

「あー！それ、そうかもしれないわ。診断受けてみた方がいいかも」と、早速ある病院に紹介状を書いて下さった。

これが私と子どもが前進するきっかけになるうとは、思ってもみないことだった。

幼少時代からの帳面や成績表を持って、診断に行った。そして、問診を受けて、先生に記録を色々見ていただいた結果…私の中で何が起こっているのかようやくわかったのだ。そう、ピクルスだった理由だ。

「ADHDがあるね。こんなにきついのに、どうして今までわからなかったの？」と先生の方がびつくりされていた。

それと同時に「算数のLD（学習障害）」があることもわかり、またこだわりのきつさもあることからLD由来の自閉傾向もあるなあ…とのことだった。

それから先生が言われたことは、

「できへんのは自分のせいとちゃうで、脳の構造の問題やからな」

この一言で私は目の前に一条の光りが差す思いがしたことを覚えている。人生が反転した瞬間だった。

今まで努力不足だとばかり思っただけで自分を責め続けて来たことが、実は自分のせいではなかったとわかって、全身から力が抜けるほどびっくりした。

あの、子ども時代からの出来ることと出来ないことの差がなぜこんなにひどかったのか、その原因がやっとわかった。もうこれで自分を責めなくてもいいのだ…。もつとこれが早くわかっていれば、私はここまで自尊心をなくしたり、自己卑下しなくて済んだのに…。悔しい思いもあった。

ここでようやく、私は自分の脳の構造について初めて知ったわけだが、次に思ったのは子どものこと。同じピクルスの長男。もしかして、長男の出来なさも何かこれに由来するのでは…。と。

それから、必死で色々調べた。

そこで思ったことは、とても似ているけれど、ただ、彼の場合は私のような偏りというよりも、全体的な遅滞なのではないだろうか…。ということだった。

早く診断を受けさせたい…。そう思ったけれども、相変わらず主人は「僕に似ているだけだ」を繰り返していた。

もどかしい思いで時を過ごし、長男は一年生になってしまった。

ちょうど、彼が入学と同時に、神戸に学びの支援センターが出来たので、ちよつと考えて、担任の先生にお手紙を書いた。

「もし、何か気になることがあればすぐにおっしゃって下さい。そうしたらすぐに診断に行きますから」と。主人はものわがりの悪い人ではないので、学校などの第三者に勧められたら、反対しないだろうと思ったのだ。

即日で担任の先生からお話があつて、学びの支援センターを勧められて、検査に行くことになった。やはり、主人は観念したようで、反対はしなかった。もしかしたら、覚悟はしていたのかもしれない。

検査を受けたら、やはり長男は軽度の知的障害があつた。その後受けた追加判定で知的にぎりぎりボーダーラインの高機能自閉症という診断名も出た。

私と同じで聴覚が弱くて、耳から言葉を理解するのが難しい。長年、私も「私は耳が悪い」と思つて来たのに、聴力検査では「よく聞こえている」と言われて、いったいなぜ??と思つてきたが、これも発達障害につきものの症状だったのだ。

また、眼球運動に不器用さがあつて、目の動きが悪いらしい。これも私と同じだ。探し物をして、なかなか見つけることが出来ない。それから、短期記憶の悪さや数字の苦手さも私と同じ。だから、

何度も同じ失敗をしては怒られるはめになる。

診断名は彼と私は微妙に違うし、私は知的には全く正常ラインだが、同じ軽度発達障害であることがはつきりした。

実は私は自分と似たドンくささを持つ長男のことを、きつく叱しかってきた。似ていると妙に嫌だというのか、私みたいにさせてはいけない…小さいうちに何とか…そんな思いだった。

そして、それには私自身の成育歴も影響している。私は出来なさをずっと責められて大人になった。何事もいつも努力が足りないからだ…と言われてきた。だから、私も長男のことを責めてきていたのだ。あんたが悪いからこうなるんだ!…と。

でも、ちよつとこれで我が家の事情は変わってきた。

私が彼を認めなかったら、同じ種類の発達障害を持つ私も認められない。私が発達障害を持つ自身の出来なさを認めることは、彼を認めることにつながる。今まで、出来ない自分を認めることが出来ず自責してきた私だが、これで嫌でも自分も彼も両方を認めなければならなくなった。運動している私達。

「親子連動型軽度発達障害」…これを私はこう呼んでいる。

最近では、お互いの似ているところを認め合って、それで慰めあっていたりする。私も彼も視野が

狭いので、しょっちゅうあちこちにつつかってアザを作るのだが、最近では「同じやなあ、アハハ!!」と笑い合えるようになった。

私は一時、自分を消してしまうことさえ考えたが、自分が人と違うところがある理由がはっきりとわかって以来、生きかたを変えてみた。

今は親の会に入って、悩めるお母さん方のお話をお聞きしたり、当事者として話をしたりして、親と当事者である子どもの思いをつなぐパイプ役を目指して頑張っている。

長男は勉強についていくのが大変になってきたので、来年から養護学級に入る方向になった。

でも、我が家は暗くない。いや、むしろ明るい。発達障害による様々な症状を笑いに変えて暮らししている。我が家では素敵な個性だ。

先日、買い物に行く場所を先に主人と決めたが、後から子どもがそこは嫌だ！違う所に行くと言い出した。しかし、自閉傾向がある私はパニックになってしまった。自閉人間は一度頭にインプットしたことを簡単に変えることが出来ないのだ。すると、主人が…

「あ!!切り替えが出来なくて苦しんでいるだろう??自閉があると大変だな。そんなにもだえ苦しまないといけないなんて。どうだ?何とかかなりそうか?」

「うう、だめだー。行き先を変えないでええ!!苦しい〜!…普通の人にならないの??」

「まあ、もたえるようなことにはならないな。よしよし、後でちゃんと行ってあげるから大丈夫だよ」。

と、もう心得たものだ。

自閉傾向だ、LDだ、ADHDだと色々持つてる奥さんを持つと大変だと思うのだが、彼は最近それが「面白い」らしい。以前から「変わった行動の多い人だ」と思ってきたのはいたらしいが、その理由がわかって以来、ますます面白くなって来たと言う。

「こんなユニークな奥さんはちよつといないから」

喜んでいいのか、何なのかわからないが、でもまあ家庭を明るくしているということではよしとしよう。

マカロニサラダの中の刻みピクルス人生も一味違っていいんじゃないの????と親子共々、思えるようになった今日この頃である。



笹森理絵

昭和四十五年生まれ 主婦 兵庫県神戸市在住

【受賞のことば】

頭の中を貫いた一筋の強い閃光。一瞬、現実の事とは思えなかった。しかし強い光はやがて、グラデーションのように柔らかく頭の中にゆっくり溶け込み、そして温かく広がった。受賞の通知を受けた時、そう感じた。誰かにこういう形で自分の人生を認めて貰えたことに、大きな衝撃と喜びを感じている。それと共に、見えにくいこの障害についての理解が、この作文から少しでも社会に広がってくれたら……と願って止まない。

選評

「変わった子」と言われ、アンバランスな成績のわが子に障害があるかもと調べるうちに、小さいころから「皆と何かが違う」と感じていた自分自身も発達障害だったと判明。しかし、深刻にならずに「親子連動型」の素敵な個性にとらえ、発達障害による様々な症状を笑いに変えて明るく暮らす様子がテンポよく描かれています。

「こんなユニークな奥さんはいない」と温かく見守るご主人に脱帽。

(山下頼充)